

まえがき

伊豆半島に「終の住処」を建ててからほぼ三十年たった。

前半は週末や連休に利用していたが、二〇〇二年七月、六十九歳を迎えて一切の職を退いたのを機に本格的に伊豆生活を始めた。それ以来でもほぼ十七年になる。

こう書くと、リタイア後の人生設計は相当に緻密だったように聞こえるかもしれないが、実のところ私はかなりせっかちで、心の赴くままに事を進める癖がある。七十歳を前にして伊豆半島に移り住んだのはいいが、半島の片すみに蝨居を決めこむには少々早すぎた。外に向かつてやりたいことがまだいくつか残っていたのだ。

一つはこれまでに積み上げてきた友人たちとのつき合い、もう一つは自由気ままな旅である。前者については今でも月一、二回、都心などに出かけて行って旧友たちと一杯飲んだり、ゴルフをしたりとの交流が続いている。多くは同世代の友人だから、時の流れに任せれば、いつの日か自然消滅するだろうが、若い人たちとの交流はこれからも続く。長生きの秘訣の一つは年下の友人を持つことだから、そうしたつき合いはできるだけ大切にしたい。幸い、伊豆にも同

世代人から二十歳ほど年下の友人までできて、今では心豊かに日々を過ごしている。

もう一つ、旅への憧憬しやうけいとなると、これまた尋常では断ち切りがたいほど心が動く。これからも気力体力に合わせて、相応の旅を続けるだろう。

伊豆に移り住んだ後も、七十代の十年間は、夫婦で毎年海外に出かけた。一つの国に留まり、三週間ほどかけて各地を巡ったものだ。どこに出かけても、起点こそ都会だが、できるだけ田舎回りに時間を割いた。それには車旅が一番、多くの国でレンタカーを手配し、走り回った。ドイツでは不慣れな右側運転だったこともあり、タイヤを縁石に擦ってパンクし、トランクを開けて仰天した。スベアタイヤがないのだ。あいにくの週末とあつて、途方に暮れながら半日を棒に振ったことを思い出す。フランスではバックして路肩から脱輪……。親切な人々の応援を得て窮地を脱した記憶が鮮明に残る。いずこの土地でも心優しい人がいるものだといふに刻んだ一瞬だった。

列車や船の旅も何回か試みた。オーストラリアではメルボルンからアリス・スプリングスまで二泊三日かけての観光列車「ザ・ガン」に乗った。車窓に映る風景は茫漠としてとりとめもなくいささか退屈したもの、車中の応接は至れり尽くせり、すっかり満足した。何事も試してみても損はない。いい思い出だけが今に残る。

七十代後半からのめり込んだもう一つの「旅のかたち」がある。歩き旅だ。本文の中で詳し

く書くが、本州横断「塩の道」から始まった私の歩き旅は、八十八か所霊場巡りの「四国へんろ道」の旅となり、熊野古道、中山道、甲州街道、三陸海岸（環境省と地元自治体で整備した歩き旅の道「みちのく潮風トレイル」）へとつながっていった。

だが、寄る年波には勝てない。海外旅行は二〇一三年のドイツ・チェコの列車旅以来、国内歩き旅は三陸海岸を歩いた二〇一六年晩秋を最後に遠ざかっている。昨今は、友人と連れだつての数日の歩き旅とか、家族とともに出かける一〜二週間の車旅などが私の旅スタイルになってきた。

私は今（二〇一九年）、八十路の後半にさしかかっている。「蟄居」とまでは言わないが、ぼつぼつ伊豆の地に腰を据え、悠悠自適の日々を過ごす年ごろになったのだ。されば、このあたりで、伊豆生活の一端でも書きとどめてみるか、そんな心境にもなってきた。

私にとつての伊豆生活は、十分すぎるほど満ち足りたものではあるが、外から見ればかなり独りよがりの、一組のファミリーが歩む一つの人生パターンに過ぎないだろう。昭和ひとけた後半生まれの日本人は、概して良き時代に生を得たように思うが、これとて私の自己満足かもしれないし、時代論も人それぞれ多様であつていい。

人生は百人百様なのだ。万人に通じる「人生の手本」などあるはずもない。

それでも時代を超え世代を超えて多くの読者諸氏と共有できる人生の秘訣とでもいうべき何

かがあるだろう。そう、好奇心を持つことだ。もう一つある。己の心の赴くままに自由に生きることだ。

好奇心とはまことに都合のいい心の働きである。一見何の変哲もない風景や事象でも好奇心を持つて観察すれば新しい発見があるかもしれない。若者ならば人を抜きんでるチャンスにながるかもしれない。八十路も半ばを過ぎた私の未来などはほんにちっぽけ。でも好奇心を持つことは案外老化防止に役立っているかもしれないのだ。まさに一石二鳥である。

本書では、私の伊豆生活の始まりから、庭づくりや動植物との交わり、知己を得た友人たちとの交流、ちよつと欲張つて、半島の生い立ちや歴史の一端にも筆が及んだ。「ちよつと欲張りすぎではないか？」ですつて。その通り。でもこれとて私の好奇心の赴くところ。恐縮ながらおつき合い願えれば幸いです。

伊豆こそわが人生

目次

まえがき 3

I 伊豆ことはじめ

ある晩夏の昼下がり 16

昆虫少年だった私 19

「イトーピア」にたどり着く 23

台地の上に家が建つ 26

II 庭づくりに励む

雑木を植える 32

四季を告げる雑木たち 36

ツツジとシヤクナゲの品種を知る 40

先達から学んだガーデニング 46

一年を彩り続ける山野草 49

ウツドデッキとたき火場	53
ブルーベリーとシイタケ栽培	56
III 動物たちと遊ぶ	

千客万来の昆虫たち	62
鳥の餌台は入場制限	65
イノシシ君の登場	70
タイワンリスは加害者か	73

IV 伊豆の友人たち

黙して働く会長さん	82
世界を股にかけるオシドリ夫婦	86
人生花盛りのアーティスト夫妻	91
誰からも愛された絶妙カップル	95
趣味三味の贅沢人生	99

V 歩き旅に出る

塩の道——古の人々の生活を想いながら歩く

四国へんろ道——己と自問自答しながら歩く

中山道——日本の歴史を学びながら歩く

三陸海岸——人々と触れ合いながら歩く

108 104

VI 伊豆半島の生い立ち

日本列島の中では新参者

128

数々の恩恵をもたらした火山活動

132

地球の営みが引き起こす地震と津波

136

険阻な地形と脆弱な交通網

140

ジオパークの未来に期待する

144

VII 続・伊豆の友人たち

VIII

- 自分流を貫き通す風流人 150
- 夢を追い続ける改革者 155
- どっしりと大地に生きる老婦人 159
- 二人三脚で三百名山に挑戦中 163
- 腕利きシェフのペンション経営 168
- 六十五歳、いよいよ人生本番 172
- 日本を陰で支える
- 流刑の地・伊豆国 180
- 大名も城もない不思議な国 186
- 江戸の繁栄にひと役買った半島の民 190
- 開国交渉の裏方・下田港 195
- 下田の歴史に見る伊豆半島の宿命——「プラタモリ」と下田の今昔 200
- 伊豆の諸街道を行き交った著名人 206
- 吉田松陰とペリー提督 211

IX 伊豆こそわが人生

静岡県は廃藩置県の落とし子 217

昭和の遺産「川奈ホテル」と「伊豆急行」 220

自然の要害に守られた桃源郷 226

「早寝早起き」が健康の基本 231

鮮魚三昧の日々 234

散歩とゴルフ 240

源泉かけ流しの湯にこだわる 244

お医者さんと老人ホーム 250

酒は飲むべし、たしなむべし 256

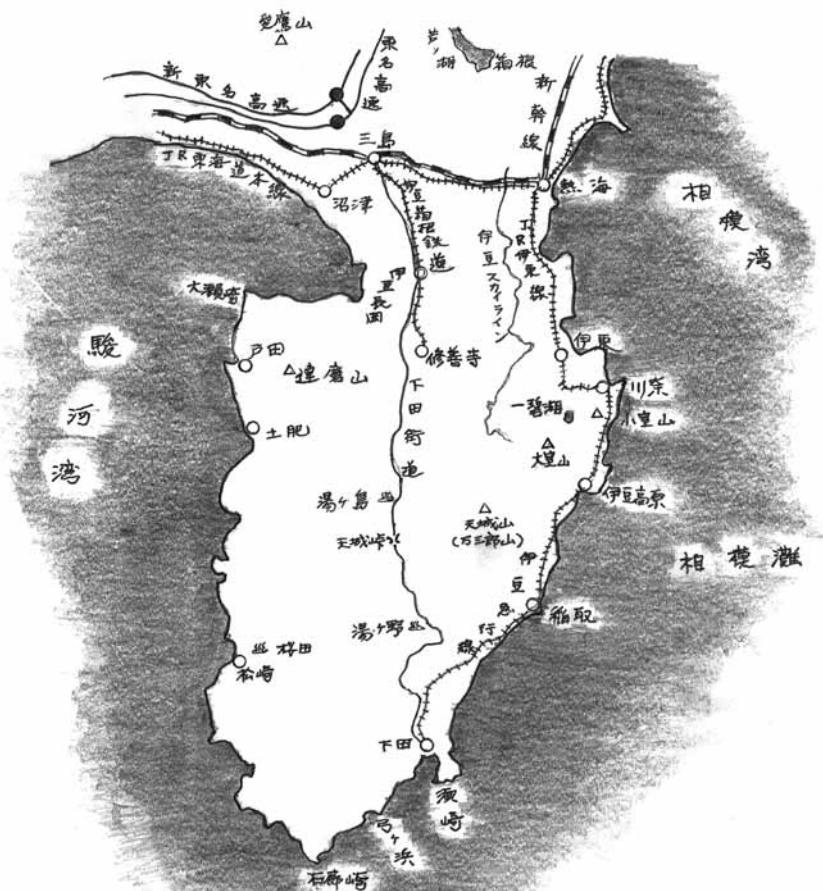
人生、下り坂が一番 261

あとがき 266

伊豆こそわが人生

——八十路からの新たな旅立ち

伊豆半島



I
伊豆ことはじめ



ヤマツツジと新緑に囲まれた筆者宅

ある晩夏の昼下がりに

読書に疲れて庭に出た。空に向かって両手をグーンと伸ばす。腰が少し痛いがつっきりした気分だ。

二〇一八年のこの年は梅雨明け以来の猛暑続きで、植物も人間も相当に干上がっていたが、八月の声を聞いてから台風がいくつかやってきて、幾分しのぎやすくなった。雷さまの号令の下、一気に地上に降り注ぐ雨は、まさに天の賜物である。

なじみのチョウやトンボが午後の日ざしを受けて軽やかに飛び交っている。ありがたくはないが、暑さに弱い蚊も活動を再開したようだ。

どこからやってきたのか小ぶりのチョウが宙からふわつと舞い降りて、アジサイの葉に止まった。何回か翅を開いたり閉じたりしたあと、太陽に向かって百八十度翅を広げ、じっと静止している。キタテハに違いあるまい。三十度を超えるこの暑さの中でも、このチョウは日光浴を楽しんでいるのか。それとも身に付いた習性か。

十年ほど前の初秋、アラスカを旅したとき目にした風景が蘇った。ホテルの植え込みに行儀よく並んで、一心に陽を浴びるチョウたちに出会ったことを。茶系で小ぶりの姿は目の前のキ

タテハそっくりだったが、ひよつとして親戚筋の仲間だっただろうか。

面白いものだと思う。歳をとり、友人の名前も旅先の地名もほとんど思い出せない昨今だが、十年も前の一瞬のシーンが、舞い降りたチョウを見たときとたん鮮明に蘇ってくるのだ。

台風一過とあって、今日の空は格別に美しい。透明度の高いブルー一色だ。裏山から吹いてくるそよ風が心地よい。セミの声を伴って、コナラの梢を揺すりながら、スーッと通り過ぎてゆく。読書もいいが、庭先での一服も捨てがたいものだ。

ウメの木陰に設えたベンチに腰を下ろして、ぼんやりと辺り一帯を眺めた。

そうだ、ここに積んでおいた落ち葉の山を根こそぎ掘り起こしたのはイノシシだった。一〇〇キロもあるような大きな石までひっくり返して、ミミズだかカブトムシの幼虫だかを食べ尽くしたら来なくなつたが、あの時はびっくりした。でも考えてみれば、彼らの方が先住民だつたに違いないぞ……。

うつらうつらし始める。

自然の中に住もう、そう思って土地探しを始めたころ、日本はバブルの真っ最中だった。那須高原から始まった土地探しは、各地を一巡したあと静岡県に戻ってきた。

ご縁だと思ふ。私は今、伊豆半島の片すみに住んでいる。しかも心地よく。

田舎住まいといえるほどの「田舎」ではないが、半島唯一の湖水・一碧湖いっぺきこにほど近く、自然

豊かな土地柄である。盆地型地形ゆえ冬の冷え込みは相当なものだし、夏の太陽も容赦なく照りつけるが、夏は朝夕がいい。朝の冷氣、そして庭中が紅く染まる日没前の一瞬はさらにいい。家を建ててはぼ三十年。定住してから数えても十七年たった。

思えば、これまでも整然として生きてきたわけではない。せっかちだから、いつも計画半ばで歩き出していた。住みついた当初は、「自然の中のピンコロなんて素敵じゃないか」程度の想いだったし、庭づくりもやり直してばかりだった。でも歳月をへて、庭もだんだん自然風になったし、当地が本当の「終ついの住すま処か」となりつつある。

それでいい。計画なんて後からついてくるものだ。

伊豆への移住がきっかけで私のがめり込んだ旅スタイルがある。歩き旅だ。都会に住み続けていればこんな風変わりな旅などしなかっただろう。塩の道をたどって本州を横断したのが始まりで、ついつい病みつきになり、四国へんろ旅とか毎年出かけたものだ……。

ちょっと待った。「出かけたものだ」とは何だ。最近はめっぼう思い出話が多くなったが、もっとポジティブに考えた方がいいぞ。二年後「八十八歳じいさん四国八十八霊場を往く」なんて格好いいじゃないか……。

睡魔の虜になりつつも、考え続ける。

伊豆半島が特別な土地とは思わない。だが、私のリタイア人生を受け入れて、かくも大きな

影響を与えてくれた大地と思えば、地べたにはいつくばって、キスの一つもしてみたい気分にもなってくる。

恩返しに、老骨に鞭打って何か書き残すことにするか。

太陽は西に傾きながらも一層輝いていた。夏の太陽はさすがにパワフルだ。ちよつと暑いがまあいいか、もう少し居眠りしよう……。

先刻のキタテハはそのままの姿でアジサイの葉上で陽を浴びている。どこからともなくアカトンボが舞い降りて、キタテハにちよつかいを出した。舞い上がったチョウは、アカトンボを追い払うと、再び同じアジサイの葉に戻って静止した。

晩夏のひとつとき、伊豆半島には平和が満ちていた。

昆虫少年だった私

ときどきわが家の庭を訪れるチョウにアサギマダラという妖艶ようえんというか、人の心を魅了するチョウがいる。このチョウとの最初の出会いは一九四九年、高校一年の夏だった。採集好きの友人に誘われ、数人連れだつて雲取山（二〇一七メートル）に登ったときのことだ。夕刻、一夜を過ごす雲取山荘の周辺を散策していると、樹々の合間を縫って優雅な大型チョウが舞ってい

菅 卓二 (かん・たくじ)

1933(昭和8)年、東京に生まれる。1958年、早稲田大学政治経済学部卒業、同年三菱金属鉱業(現三菱マテリアル)に入社。1962年、三菱アルミニウムに転社し、1996年同社を退社。1996年～2001年、菱和金属工業勤務。2002年6月、会社員生活を終える。2003年、70歳で静岡県伊東市に転居し、現在に至る。著書に『四国へんろ道ひとり旅』『八十歳「中山道」ひとり旅』『本州横断「塩の道」ひとり旅』(いずれも論創社)がある。

伊豆こそわが人生

——八十路からの新たな旅立ち

2019年11月15日 初版第1刷印刷

2019年11月25日 初版第1刷発行

著 者 菅 卓 二

発行者 森下紀夫

発行所 論 創 社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／森田幸恵(森田デザイン事務所)

印刷・製本／中央精版印刷 組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1859-7 ©2019 Kan Takuji, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。